

続・東海地方の 古代瓦塔研究ノオト

● 永井邦仁

8世紀の東海地域における瓦塔について、独特の軸部表現技法をもとに設定した猿投窯型を中心に、今度は屋蓋部にも注目してその全体プロポーションを概観した。それは8世紀後半段階に全体の大型化に加えて屋蓋部の大型化という2つの指向性をもっていたが、やがて屋蓋部を強調する点のみになり、9世紀初頭には極端に高さの詰まった小型の瓦塔へ変貌したと推察した。

あれから10年

「東海地方の古代瓦塔研究ノオト」（以下「ノオト」）は、筆者が10年前の『研究紀要』第7号に著した文字通り瓦塔の研究ノートである（永井2006）。8世紀の東海地域では、須恵器窯で生産された多数の瓦塔が造立されていた。とりわけ8世紀後半の猿投窯（猿投山西南麓古窯跡群）産の一群は、量産化に適した独自の成形技法が認められる。まずこの点を指摘した。その後、当該地域においてこの特徴を有する瓦塔を猿投窯型と呼び、美濃須恵窯産をはじめとする列島各地に分布する当該期の瓦塔との比較に備えた（永井2008）。他地域においても、瓦塔が8世紀後半を中心に須恵器窯で生産されていたことが判明しつつあったからであるが、一方で9～10世紀代の東日本に分布する土師質で小型の瓦塔との峻別が必要という考えもあった。

ところで、当初最大の関心はその年代だったのであるが、長らく実測図を作成しつつ上記のような見通しが立ってくると、その造立目的を考えるようになり、一案として、尾張平野部における開発で墓地を削平した際の鎮魂、を提示した（永井2013a）。もちろん、従前より指摘されている瓦塔の性格も含めて、奈良～平安時代の列島における多様な造塔習俗の一端にすぎないとも考えているのだが、山中における瓦塔造立にしても（永井2013b）、それが造立された土地と結びついてモニュメントになっていたことが重要だと考えている。

そして今、あらためて造立された瓦塔に関心を寄せるとき、そもそもどれくらいの大きさでどのような外観であったのか、という素朴な問題に立ち戻ることになる。通常、遺跡で出土する瓦塔は小片となっていることが多く、そういった視点はひとまず措かれてしまう。したがって多くの概説では、東京都東村山市宅部山遺跡などの一部事例によって説明することで済ませてきた。しかしながら、上記のように地域ごとの瓦塔類型を想定するのであれば、当然それぞれの類型において大きさを復元的に導き出すことから始めるのが筋である。幸いにして、猿投窯型の中には残存状況の良好な資料が多くみられ、この課題に取り組むことが可能である。

尾張地域の瓦塔拾遺

まずは「ノオト」以降に観察した猿投窯型瓦塔のいくつかを紹介しておきたい。

鳴海286号窯 名古屋市の須恵器窯跡で、1985年に発掘調査がおこなわれて、鳴海32号窯式期の須恵器とともに瓦塔片が約10点出土している。出土部位は屋蓋部のみである。筆者は、2008年に展示のために接合・復原された状態のものを図化した。これにより屋蓋部の大きさが推定できるようになった。屋蓋部の上部台輪には高欄が付加されている。これは棒状および板状粘土を接合して、後者はへうくり抜きによって柱などを表現している。丸瓦列はやや太めの棒状粘土を並列して貼付けたもので、これには節を入れていない。一方、平瓦相当部分

は、ヘラで段状の欠き取りをおこなって、平瓦一枚ずつが表現されている。全体によく反った隅降棟には段がない。裏面の垂木は地垂木と飛檐垂木の二軒構成となっており、図 2-2 のように丸瓦列とは対応していない。また垂木先は軒端にまで至っておらず、この点は、野地よりも軒先瓦の方が突出する実際の建築によく合致しているといえ、類例としては、黒笹 36 号窯出土の瓦塔屋蓋部がある。

弥勒寺廃寺跡 北名古屋市（旧西春町）に所在する奈良時代創建の古代寺院跡である。1962年の発掘調査で建物基壇を検出し、瓦や須恵器とともに瓦塔軸部1点が出土している。その全形は不明であるが、壁体から組物の持ち送り表現が突出しているので軸部上半部と考えられる。この持ち送りからは横方向に軒桁状の粘土帯が伸びており、壁体を四周する庇状の張り出しから垂下させる構成になっている。そしてへうを使ったり抜きなどによって表現された斗（ます）もあることから、実際の塔建築における垂木を支える丸桁（がぎょう）のようにもみ

える。しかしながら想定される軸部上端位置はさらに上方であり、同様の粘土帯が上にもう一段存在していたと想定され、そちらが丸桁に相当することになる。筆者は、このように軸部壁体から離れた粘土帯によって丸桁・軒桁を表現する技法を、簾状粘土帯もしくは空中粘土帯と呼び、8世紀の猿投窯において前者から後者への技術的進化がなされたものと考えている。これを指標とすると当該瓦塔も猿投窯型であるが、斗部分がやや詳細に表現されている点や、それを浮き彫りさせるために凸形のスタンプを使っていないことから、比較的初期段階のものと推定される。

大矢遺跡 稲沢市に所在する古墳時代以降の集落遺跡である。多数の採集資料があり瀬川貴文によって古墳時代中期や奈良～平安時代にピークがあることが示されている（瀬川 2004）。3点ある瓦塔もその一部で、出土状況はあきらかではないが奈良～平安時代の須恵器や灰釉陶器に伴うものと考えられる。

屋蓋部は2点あり、やや間隔のあいた丸瓦列

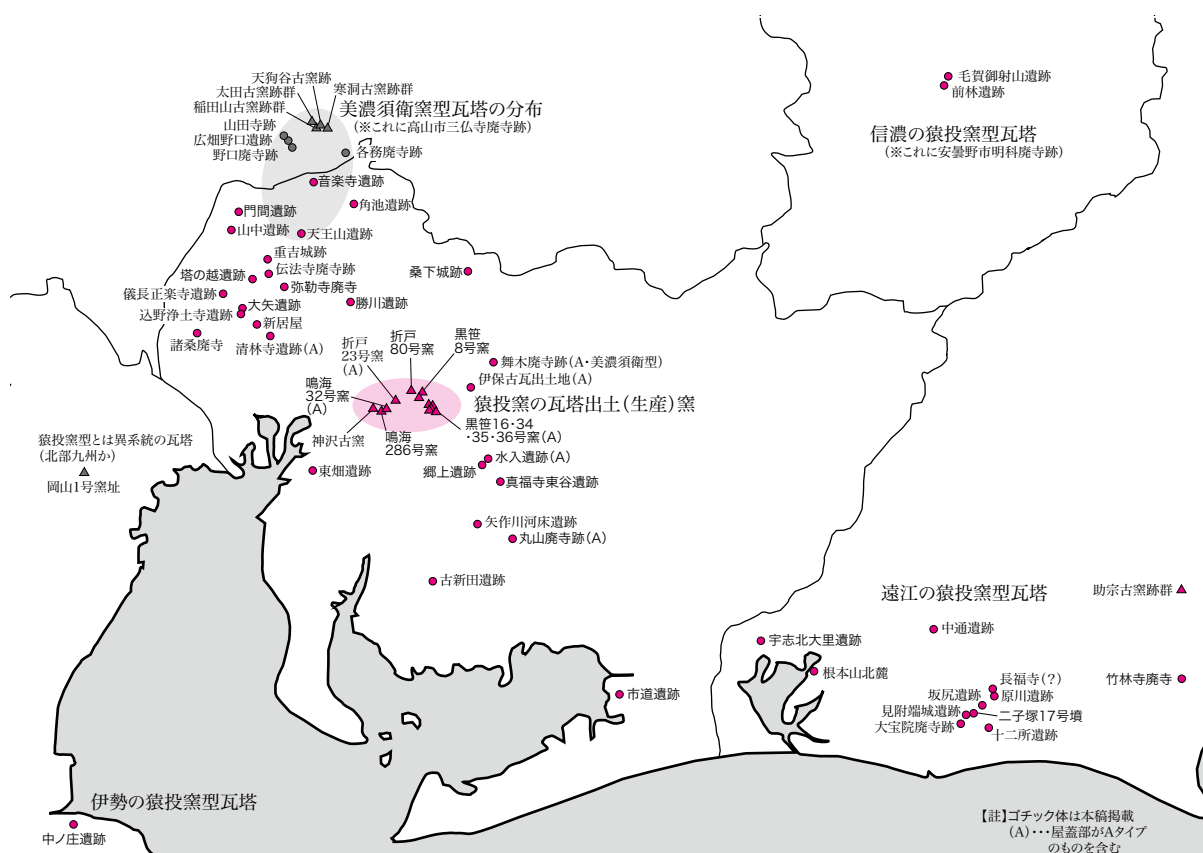


図1 東海地域の瓦塔出土分布図 (1:1,000,000)

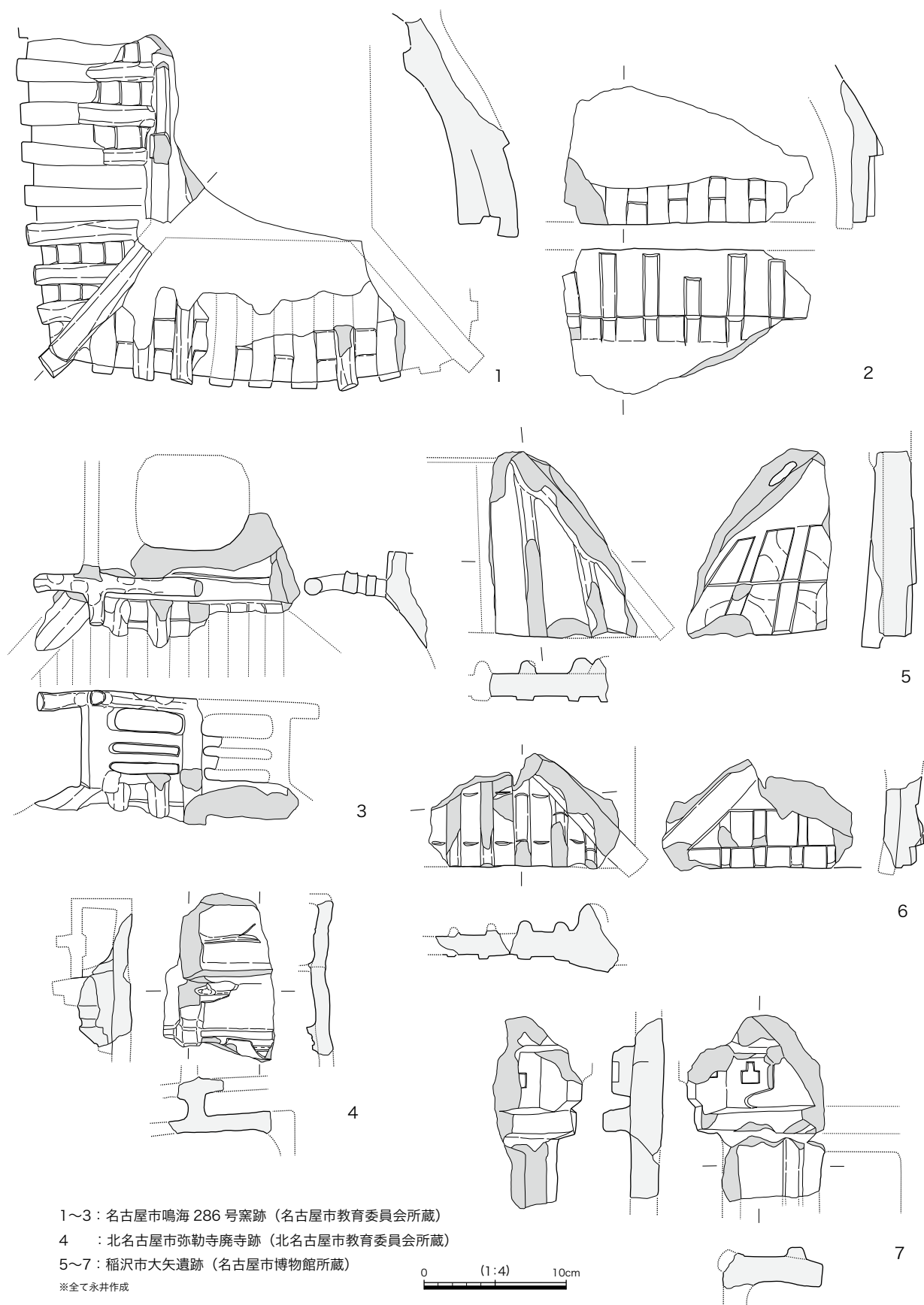


図2 尾張地域の猿投窯型瓦実測図 (S=1:4)

と反りの少ない平瓦部分が特徴である。図 2-4 ではそれに対して加工が少なく、図 2-5 では節を入れて一枚ずつの表現としている。垂木はともに二軒だがその長さは異なっており、焼成の違い（前者は明白色、後者は明灰褐色）も考慮すると異質な要素が多い。しかしながらこれらが構造上組み合わない理由は見当たらないことから、やや見栄えは悪いかもしれないが、一揃えであった可能性も考えておくべきであろう。

軸部は、開口部の一部がかかっていることから初層のものである。柱や桁などに赤色顔料の付着もあり、赤彩されていたと考えられる。壁体の厚さは約 2cm で比較的厚く、粘土紐積み上げによるものと考えられる。開口部上方の長押も太く突出し武骨な印象となっている。またその上部には斗を凸形スタンプで浮き彫りにした粘土帯が貼付けられている。これは先述の簾状粘土帯や空中粘土帯とは異なる技法で、壁付き粘土帯と呼ばれ、最も広範にみられる組物表現の技法である（高崎 1989）。猿投窯型瓦塔においても、豊橋市市道遺跡や磐田市見附端城遺跡出土例にある。

折戸 80 号窯跡 日進市の須恵器窯跡で、1977 年の発掘調査によって折戸 10 号窯式期の須恵器が多量に出土し、これに瓦塔初層軸部と屋蓋部 1 点が共伴している。いずれも残存部分から全体の形状が復原でき、既に高崎光司によって東海地域の瓦塔代表例として早くから実測図が提示されていたが、このたび新たに実測図を起こした。

屋蓋部で最大の特徴は、リズム感のある丸瓦列と裏面の二軒構成の対応関係である。特に棒状粘土を並べた丸瓦列は、節を入れないシンプルな線を呈しており、豊田市・水入遺跡出土の瓦塔にも類例が認められる。隅降棟には段があるのでその先端部は稚児棟ということになるが、その間隔が長く実際の塔建築でみられるものに比べバランスを欠いている。

初層軸部は、粘土板組み合わせによる本体部にやや太めの組物持ち送り表現を貼付け、その上部に接合した空中粘土帯が四周

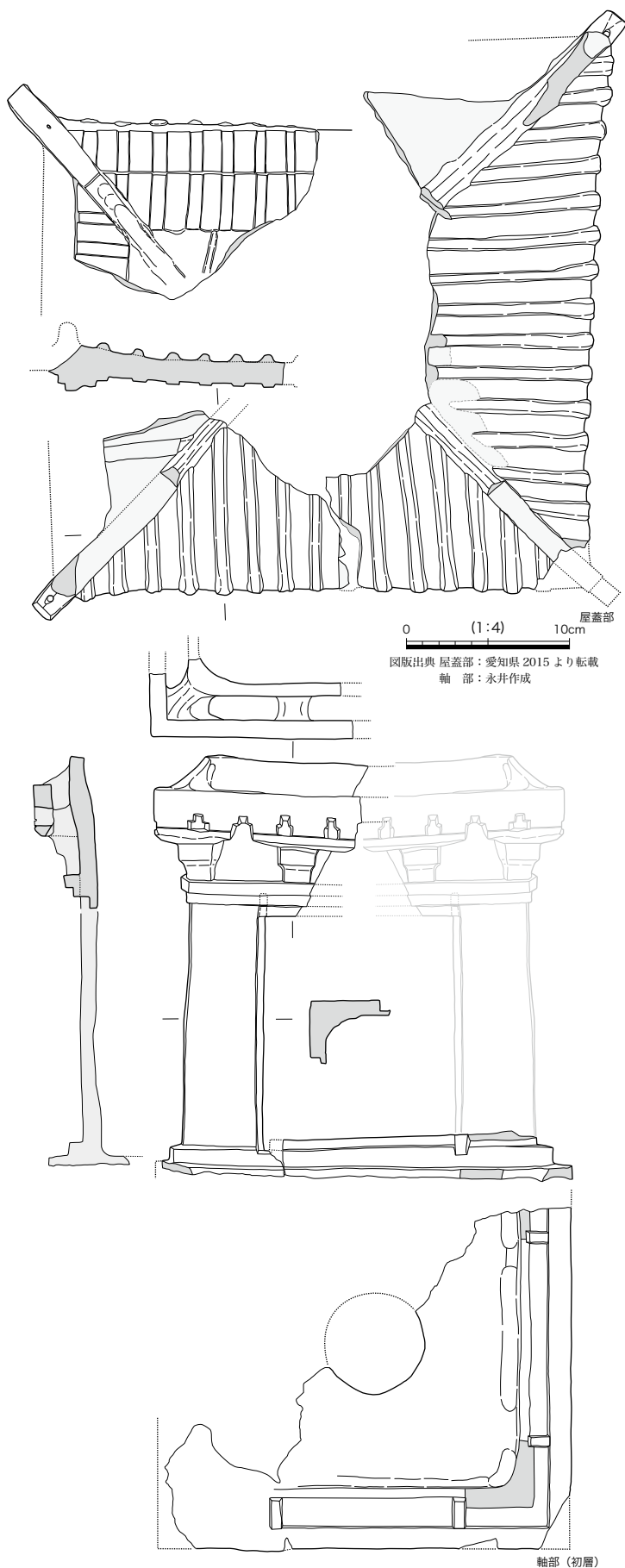
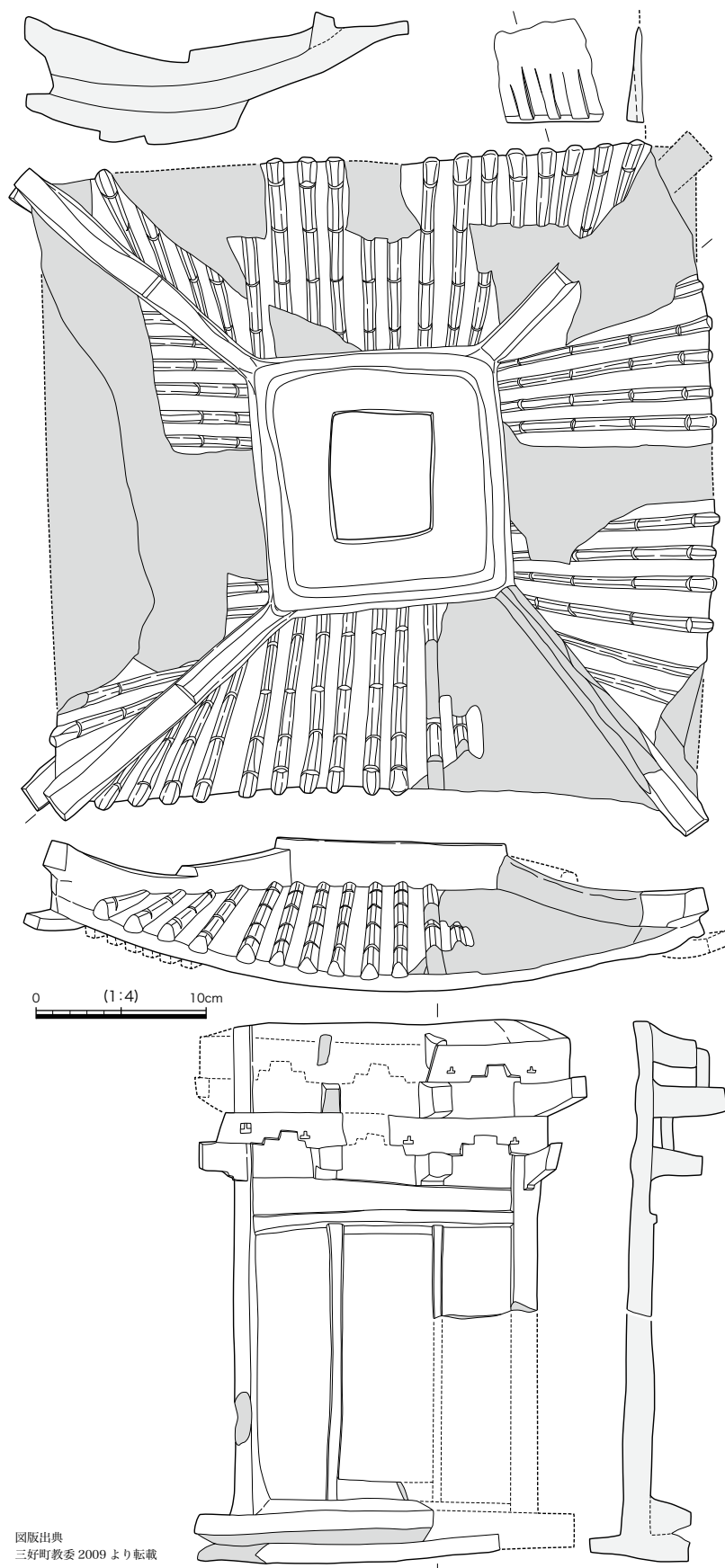


図3 折戸 80 号窯跡出土瓦塔実測図 (S=1:4)

をめぐる構造となっている。空中粘土帯はヘラで切り込みを入れて斗の凹凸を表現しているが、凸形のくり抜きはヘラでなされている。軸部底部の中心には正円孔があり、ここに心柱を通しつつ瓦塔を造立したと考えられる。底辺長は約21cmで幅広（約15cm）の開口部をもつ比較的どっしりとした印象の筐体に復元可能である。開口部上隅には深さ0.7cmの孔があり、それに対応する下端には方形の抉りが入っている。おそらくこれらが扉（木製か？）の軸受けとなっていたのであろう。

黒笹 34号窯跡 みよし市の須恵器窯跡で、黒笹 16・17号窯跡と並列する。南南東へ約300mの別の谷には多口瓶や瓦塔が出土した黒笹 35・36号窯跡などの須恵器窯が位置している。黒笹 34号窯跡の時期は、長頸瓶の頸部接合が全て三段構成であるので折戸 10号窯式期前半である。2006年にこれらの窯跡が発掘調査されている。灰層を始めとして当該窯跡からは多量の瓦塔が出土し、一部は後続する黒笹 16号窯跡にも混入していた。さらに注目されるのは、それらは個体差が激しいことで、とても一揃えを構成していたとは考えにくい。おそらく一揃えに対して余分に作って、状態の悪いものを廃棄したと考えられる。

このうち最も残存状況の良好で類似する2点の屋蓋部と初層軸部1点が一揃えであったと考えられる。屋蓋部は全体に大きく反りが入っており、大陸の建築のような印象を受ける。また軸部を受ける中央の台輪の一边が約14cmであるため単体で見ると大振りにみえるということもある。さて丸瓦列は、棒状粘土を貼付けたものに節を施したもので、概ね等間隔に並列しているが、隅降棟に近づくにつれて扇状に伸びるように



図版出典
三好町教委 2009 より転載

図4 黒笹 34号窯跡出土瓦塔実測図 (S=1:4)

配置されている。また隅降棟の半ばには段があって、位置のバランスは良くないがそこから先が稚児棟になる。垂木は二軒で、屋蓋部基盤の裏面に粘土板を貼付けてへうで欠き取って表現しているが、当該箇所は大部分が剥落してしまっている。

次に軸部をみると、焼成時のヒビや歪みが入っているが、高さ約 32cm に対して半ばでの幅が約 17cm できわめて縦長な形状である。それに呼応して開口部も狭く幅約 5cm しかない。これらの上部には、角棒状に単純化された組物持ち送りが上下 2 つずつ突出し、それぞれに載るかたちで空中粘土帯が四周している。粘土帯はへうで切り欠き成形し、斗を表現するために凸形スタンプを使用している。しかしながらその押は疎らであり、とてもその意図や実物建築の組物を正確に理解しているものとはいえない。例えば同窯跡出土には、軸部本体（壁面）におびただしい凸形スタンプを施工されたものもあり（図 6-2・3・9）、これなどはほとんど「遊び」といってよい。

猿投窯型の技法定着と南比企窯への伝播時期

以上の各説でふれてきたが、猿投窯型瓦塔の類型と段階設定は、粘土帯による軸部の組物表現と壁体の成形技法を基軸におこなう（永井 2013）。その変化は、図 5-1 ～ 3 のように簾状粘土帯・底状粘土帯から空中粘土帯への進化と、粘土紐積み上げによって壁体を作る段階から、薄くて均一な粘土板を組み合わせる段階への進化である。前者は、底状粘土帯に若干の簾状粘土帯の付く岡崎市真福寺東谷遺跡の瓦塔が 8 世紀前半に比定され（永井 2009）、より発展した簾状粘土帯のある勝川遺跡の瓦塔（図 5-1）も、その廃棄年代から推測して概ね 8 世紀前半までには造られたと考えられる（永井 2016）。その後、黒笹 34 号窯跡では、底状粘土帯（図 5-4）が多用されつつ空中粘土帯（図 5-3）も登場している。一方、壁体の成形に関して、先述の鳴海 286 号窯跡の瓦塔では、比較的厚みのある粘土板を加工している段階であり、厚さ 1cm 以下の粘土板を素材とするようになるのは黒笹 34 号窯跡や同 35 号窯跡の瓦塔を待つことにな

表 1 画塔が生産された猿投窯

窯跡名	窯式期	瓦塔の部位	瓦塔の特徴
折戸14号窯跡	鳴海32	軸部	軸部粘土紐積み上げ
折戸36号窯跡	鳴海32	軸部	軸部粘土紐積み上げ、大型
黒笹8号窯跡	鳴海32	屋蓋部・軸部	屋蓋部（Bタイプ）は反りなし・軸部粘土紐
鳴海32号窯跡	鳴海32	屋蓋部	屋蓋部（Aタイプ）
鳴海286号窯跡	鳴海32	屋蓋部	屋蓋部（Bタイプ）に高欄付
黒笹31号窯跡	鳴海32後半	屋蓋部・軸部	屋蓋部（Aタイプ）
折戸23号窯跡	折戸10前半	屋蓋部・軸部	屋蓋部（Aタイプ）は最上層・軸部粘土紐
黒笹34号窯跡	折戸10前半	屋蓋部・軸部	屋蓋部（Bタイプ）・軸部組物表現は多様
黒笹35号窯跡	折戸10前半	屋蓋部・軸部	屋蓋部（A・Bタイプ）・軸部に底状粘土帯
黒笹36号A窯跡	折戸10前半	屋蓋部・軸部	屋蓋部（Aタイプ）
折戸80号窯跡	折戸10前半	屋蓋部・軸部	屋蓋部（Bタイプ）・軸部に空中粘土帯
黒笹16号窯跡	折戸10後半	軸部	軸部大型、粘土紐※黒笹34号窯から混入

る。したがって猿投窯型瓦塔の登場を鳴海 32 号窯式期に求めるにしても、指標となる技法の定着はその後半から折戸 10 号窯式期ということになろう（表 1）。

しかもこれは東海地域にとどまらず、関東地域の瓦塔にも影響を及ぼしていると筆者は考えている。先述のように 8 世紀前半の勝川遺跡の瓦塔に存在する簾状粘土帯であるが、関東地域では、宅部山遺跡の瓦塔やそれと同型の瓦塔が南比企古窯跡群に属する埼玉県鳩山町新沼窯などにある。そしてこれらの簾状粘土帯は、薄い板状粘土を加工している点に注視される。筆者が観察した新沼窯の粘土帯は、上面には底状粘土帯に貼付けた痕、裏面には持ち送りの突出が食い込んだ凹みがある。厚さ 1cm の粘土板をへうで切り欠き、くり抜き加工したものであるが、一連の作業は平板上にておこなわれたとみられる。この状況から、粘土板素材を多用し始めた頃の猿投窯との関連が考えられるのである。新沼窯は、武蔵国分寺へ納入する瓦の生産拠点として開窯されたもので、大川清によって天平 13 ～ 17 年（741 ～ 745）の瓦生産が想定されている（大川 1995）。おそらく須恵器や瓦塔は瓦と同時に焼成ではなくそれ以降と考えられるので、概ね 8 世紀第 3 四半期を中心とする年代が想定される。これは先に示した猿投窯型瓦塔における技法の定着期に相当しており、東海地域（猿投窯）から関東地域（南比企窯）への技法の伝播も、それとほぼ同時であったとみることができる。

瓦塔軸部の大きさ

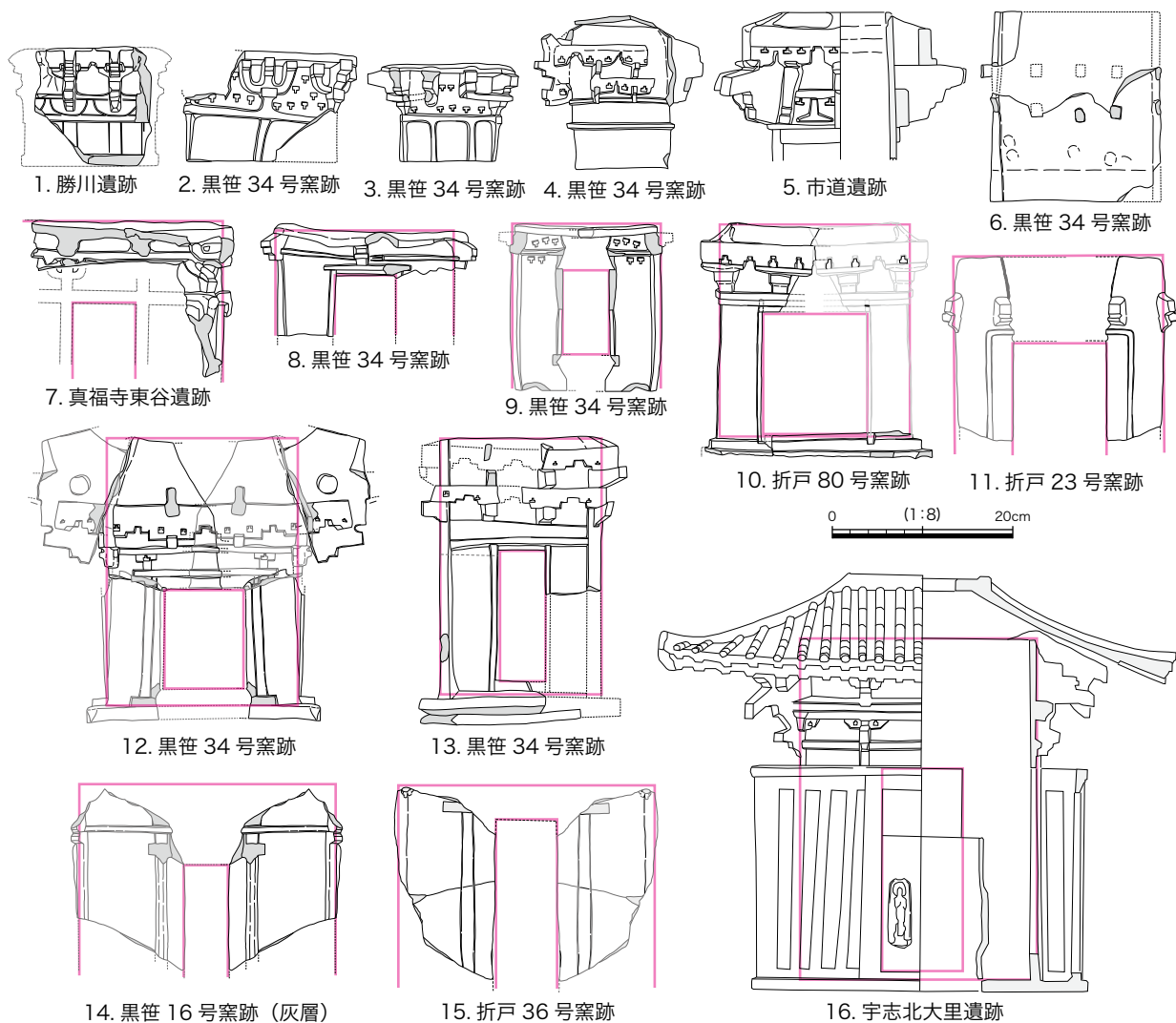
さて前項のような瓦塔軸部の技法変化が生産窯で進む理由は、その出土点数や技法が統一さ

れる過程からみても、量産化に向けた作業効率の向上が第一にあるのは相違ない。それでは、どのような瓦塔の量産を目論んでいたのか、規模や全形を復元的にみてゆきたい。

そこで猿投窯型瓦塔の軸部を初層とそれ以外に区分して復元可能なものを集成した（図5）。まず初層以外でみると、底状・簾状粘土帯がある勝川遺跡や黒笹 34 号窯跡（図5-1・2）では高さよりも底辺が長く、横長な形状となっている。なお図5-2については柱間が2間なので最上層（第五層）の可能性が高く、そのため中間層（第二～四層）より低いと考えられる。これに対して、空中粘土帯のある黒笹 34 号跡や市道遺跡（図5-4～6）では縦長な形状になって

いる点に注目できる。さらに図5-6のように、一回り大きなものがある。ちなみに同窯跡では同一形状・規模の軸部がもう1点出土しているので、大型品の存在は確実である。

次に初層軸部で比較してみる。初層軸部は瓦塔の機能の根幹をなす部品である。すなわちそれは仏像や経典など信仰の対象を納める厨子であり、例えば宇志北大里遺跡の瓦塔では、型押しで仏像を浮き彫りにした方形の筒（押出仏）がこれに該当する（図5-16）。さて、初層軸部で縦横比の判明する事例に限ると、先述のように折戸 80 号窯跡の瓦塔（図5-10）は比較的横幅のある形状であるのに対して、黒笹 34 号窯跡（図5-13）では極めて細身な形状である。そ



図版出典

1. 愛知県埋蔵文化財センター 1992 をトレスして作成、2～4. 三好町教委 2009 から転載、5. 豊橋市教委 1993 をトレスして作成、6. 三好町教委 2009 から転載、7. 岡崎市教委 1982 をトレスして作成、8・9. 三好町教委 2009 を改変、10. 永井作成、11. 永井 2005 を改変、12～14. 三好町教委 2009 を改変、15. 永井 2005 を改変、16. 静岡県 1992 をトレスして軸部の復元高（42.3cm）を実際高（38.5cm）にまで低くして作成。

図5 猿投窯型瓦塔の軸部（1～5：初層以外、6～16：初層，S=1:8）

の一方で同窯では、幅広な開口部の初層軸部も出土している（図 5-12）。当該資料は、3つの破片資料を、空中粘土帯と長押の位置で合わせることによって図上復元したものであるが、巨大な組物の持ち送り表現がひと際目を引く。これは後述するように、大型化する屋蓋部を支えるために作り込んだ結果と考えられ、全体の中で大きな比率を占めているが、それでも開口部は折戸 80 号窯跡に近い規模となっている。同様に折戸 23 号窯跡の瓦塔（図 5-11）も幅広な開口部が想定される。当該資料は壁体四面全てに開口部があるが、主要な開口部のみが幅広でさらに長押や柱の表現が付加されている。

そして、初層軸部の中にも大型のものが存在する。黒笹 16 号窯跡灰層（実態としては黒笹 34 号窯跡からの流れ込み）の瓦塔（図 5-14）と折戸 36 号窯跡出土と推定される瓦塔（図 5-15）である。これらは開口部から壁体隅までの長さが上述の一群よりも約 1.5 倍大きい。したがって、開口部幅を狭く見積もっても一回り大きくなると推測される。この 2 点に共通しているのは、壁体を粘土紐積み上げで成形している点である。この技法は、曲面を中心とする埴輪や土器の成形と同じであるから、平面で構成された直方体を作るのには不向きである。粘土紐で生じた壁体表面の凹凸を解消するのに手間がかかるうえに、厚手で過重になりがちだからである。おそらくそういった欠点を克服するためにも、粘土板組み合わせによる技法への転換がなされたと思われる。宇志北大里遺跡の瓦塔は、猿投窯型瓦塔の中でも最終形態に属するものであるが（永井 2006）、その規模は基壇底辺長 37.8cm（推定復元高 202.8cm）にもなる。その初層軸部は大型に分類されるが、軸部の壁体は 4 枚の粘土板を組み合わせで成形している（稲垣 1967）。このことから、最終的には粘土板組み合わせによって大型品を作ることが可能になっていたことがわかる。

このように、各層の軸部には一定サイズのものの対して大型のものが存在する。ただし時期別にみると、初層軸部では、鳴海 32 号窯式期（折戸 36 号窯跡）から最終段階（宇志北大里遺跡）までの各期に存在しているのに対して、初層以外の軸部では、折戸 10 号窯式期前半（黒笹 34

号窯跡）に限られる。例えば宇志北大里遺跡の瓦塔では、上層の軸部は幅 13.0～15.5cm、高さ 15.8～17.5cm である。最大の第二層軸部をもってしても黒笹 34 号窯跡（図 5-6）には及ばない。ところが初層軸部は類例中ほぼ最大級であるから、「大形の初層と比較して、二層以上はあまりに小形」と指摘（稲垣 1967）されることになる。当然、実際の建築からするとかなりアンバランスな組み合わせである。

瓦塔屋蓋部の大きさ

軸部に対して、屋蓋部はどのような分類や変遷が考えられるだろうか。分類については、石田成年による A・B タイプの区分（石田 1997）に加えて B タイプに近い C タイプを想定している（永井 2006）。石田は、A タイプは東日本、B タイプは西日本に多いとする。B タイプを主体とする猿投窯型は西日本的といえるが、鳴海 32 号窯跡（図 6-19）のように A タイプがその初期段階から存在している点も注意しておかねばならない。一方、関東地域における屋蓋部の変遷は、8 世紀中葉までに B タイプ（勝呂類型）と A タイプ（多武峰類型）がともにみられ、その後 A タイプで占められる（池田 1998）。概略的には A タイプの方が新しいといえる。そして、東海と関東を技法的につなぐと考えられる宅部山遺跡や南比企窯跡群の瓦塔は多武峰類型であることから、A タイプも東海地域で登場し関東地域で広まった可能性が考えられる。

さて冒頭に述べた観点で、屋蓋部で一辺の規模が想定可能な事例を集成し、実測図を反転するなどして全形を復元した（図 6）。そして軸部を受ける台輪とそこから伸びる隅降棟を基準にして相互の大きさを比較してみた。すると 2 つの興味深い点を指摘することができる。

1 つ目は、台輪の大きさが約 12.8～17.6cm であるのに対して、隅降棟の長さは約 8.8～18.4cm と幅がみられる点である。そして時期別にみると、8 世紀前半から第 3 四半期（鳴海 32 号窯式期）と推測される竹林寺廃寺跡などの瓦塔（図 6-1～3）は、台輪一辺の長さが隅降棟の長さとはほぼ同じかむしろ長くなる傾向にある。ところが、8 世紀後葉（折戸 10 号窯式期）

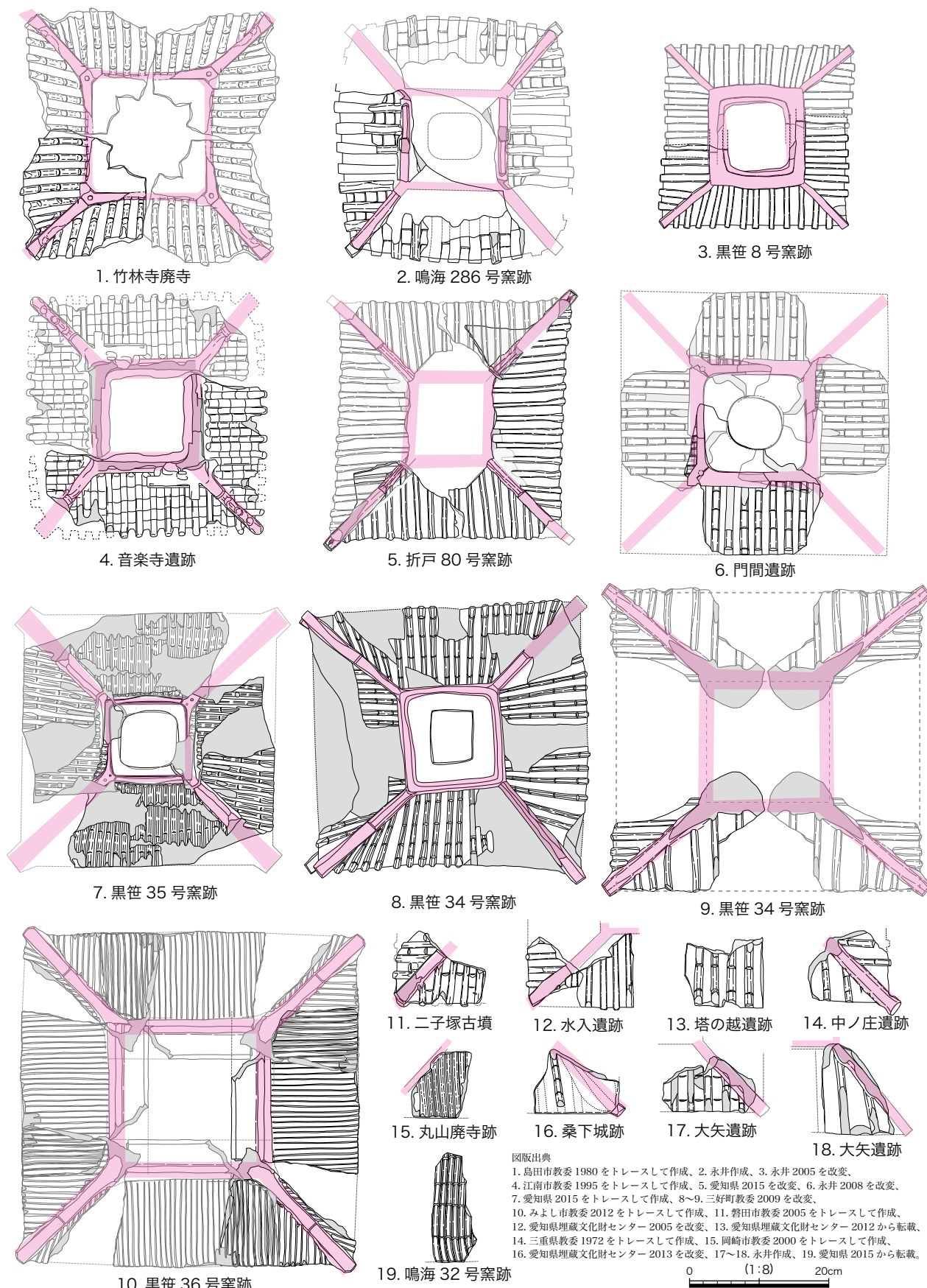


図6 猿投窯型瓦塔の屋蓋部 (S=1:8)

の折戸 80 号窯跡や黒笹 34・35 号窯跡の瓦塔(図 6-5・7・8)では、長い隅降棟が目立っている。当然、これらが上層の屋蓋部であれば、逡減した軸部を受ける台輪は下層に比べて小さく作られているのであるが、図 5-8 は同一規模の屋蓋部がもう 1 点出土しているから、当該資料が極端な事例ではないことがわかる。以上のことから軸部の底辺長が変わらないかもしくは細身になるのに対して、屋蓋部が大型化することで、全体のプロポーションに変化が生じているものと推測することができる。

2 つ目は、明らかに全体が大型化したものがみられる点である。黒笹 34・36 号窯跡(図 6-9・10)は隅降棟だけでなく台輪一辺の長さが上述の一群を凌駕している。すなわち受ける軸部そのものも大型ということになる。また小破片ながら大矢遺跡(図 6-18)や鳴海 32 号窯跡(図 6-19)は軒先から台輪までが比較的長く、同様にみることがきる。このうち黒笹 36 号窯跡と鳴海 32 号窯跡は鳴海 32 号窯式期であることから、猿投窯型の初期段階にみられる事象としてとらえることも可能となる。ただしこの点は、折戸 10 号窯式期前半(黒笹 34 号窯跡)に上層軸部の大型品があったとした先述の検討とはずれが生じるが、むしろその移行期にピークがあることをうかがわせる。

以上をまとめると、8 世紀代の瓦塔における屋蓋部の大きさについては、それ自体が大型化する指向と、特に軸部との関係において相対的に大型化する指向の 2 通りがあるといえる。これらは共に進行し連関し合っており、瓦塔のプロポーションを決める重要な要素になっていると考えられる。

瓦塔の推定復元

以上の検討を受けて、屋蓋部における 2 つの指向が共に存在する黒笹 34 号窯跡において、瓦塔の全形を復元してみる。なお筆者はすでに、当該窯跡の報告書(三好町 2009)で瓦塔の図上復元を試みている。その際は、屋蓋部の台輪に軸部が収まることを前提に、焼成状況(二次的なものも含む)も鑑みたものであった。具体的には高さの低い軸部(図 5-3)と屋蓋部(図

6-8)の組み合わせを最も良好と判断したのであるが、先述のように軸部に横幅のあるものと縦長なものがあり、前者から後者への変遷を想定すると、上記の組み合わせに縦長の初層軸部(図 5-13)をもってくるのは再考が必要と考えた。そのため同検討時にもう一つの候補としていた縦長の軸部(図 5-4)をもつて復元したのが図 7 の瓦塔 1 である。

もう一つの瓦塔 2 は、台輪の形状が不明ながら大型に分類される屋蓋部(図 6-9)に、やはり大型の軸部(図 5-6)が載るものと想定し、それに巨大な持ち送り表現が目立つ初層軸部(図 5-12)の組み合わせで復元してみた(図 7 の瓦塔 2)。巨大な持ち送りは、その上にくる大型化した屋蓋部を支えるために工人たちが考案したものと考えられる。ただし管見では、集落遺跡などでこのように巨大な持ち送りの破片の存在を知らないで、この発想は試作段階に止まったのかもしれない。もっともこの復元では

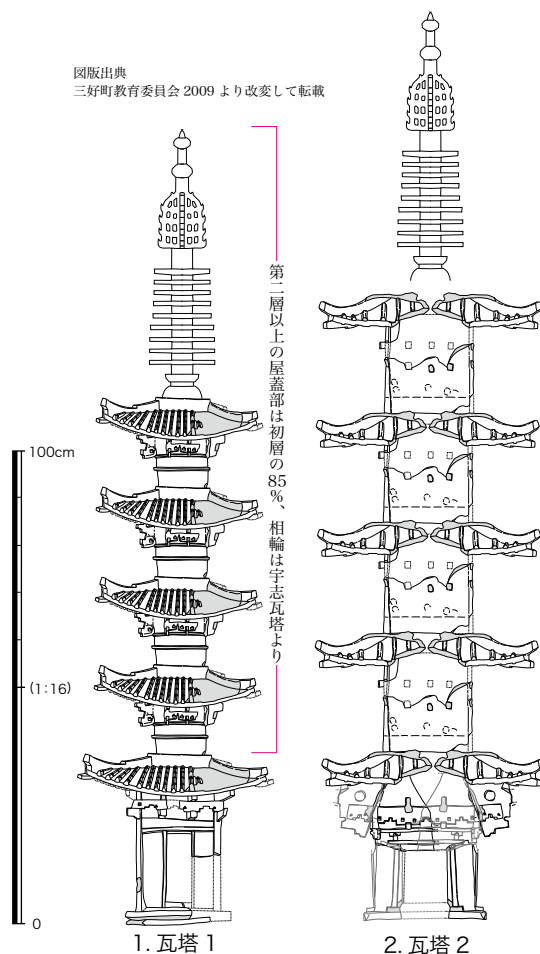


図 7 黒笹 34 号窯跡出土瓦塔の推定復元 (S=1:16)

重心が上部になってしまうので、初層軸部は大型のもの（図 5-14 など）で、壁体そのもので上層を支える必要が考えられる。まさに同窯跡は、瓦塔生産の実験場であったのである。

瓦塔の巨大化、そして屋根への集中

黒笹 34 号窯跡の段階は、大型化への途上であつたと考えられる。というのは、全形復元された瓦塔の多くはさらに高いからである（図 8-2～4）。特に塩尻市菖蒲沢窯跡は 8 世紀後葉の須恵器窯であるが、出土瓦塔は約 2.3m と超大型である。ただし当該例は、組物の表現技法が猿投窯型のそれと異なるので少なくとも同工人の作ではない。さてその形状を比較すると、

初層軸部は宇志北大里遺跡瓦塔の方がよく発達し、加えて同瓦塔では、上層の軸部が相対的に小さく、さらに軸部上半に覆い被さるようにして軒が垂下しているのが、外観として軸部屋蓋部が強調される形状になっている。以上の特徴は、先に軸部・屋蓋部の大きさで検討した指向そのものであるが、ここに 8 世紀における瓦塔発達の究極の姿をみることができる。そして同様の指向は、9 世紀以降の東日本で展開する小型の瓦塔でさらに極端になり、実際の塔建築から大きく乖離してしまうが（図 8-5）、これらは猿投窯型と形状や製作技法は違えど、その指向は共通し、宅部山遺跡瓦塔などを通じた延長にあると評価しうる。また、木製塔・木製小塔から瓦塔に至るまでを比較してもそれは明確であ

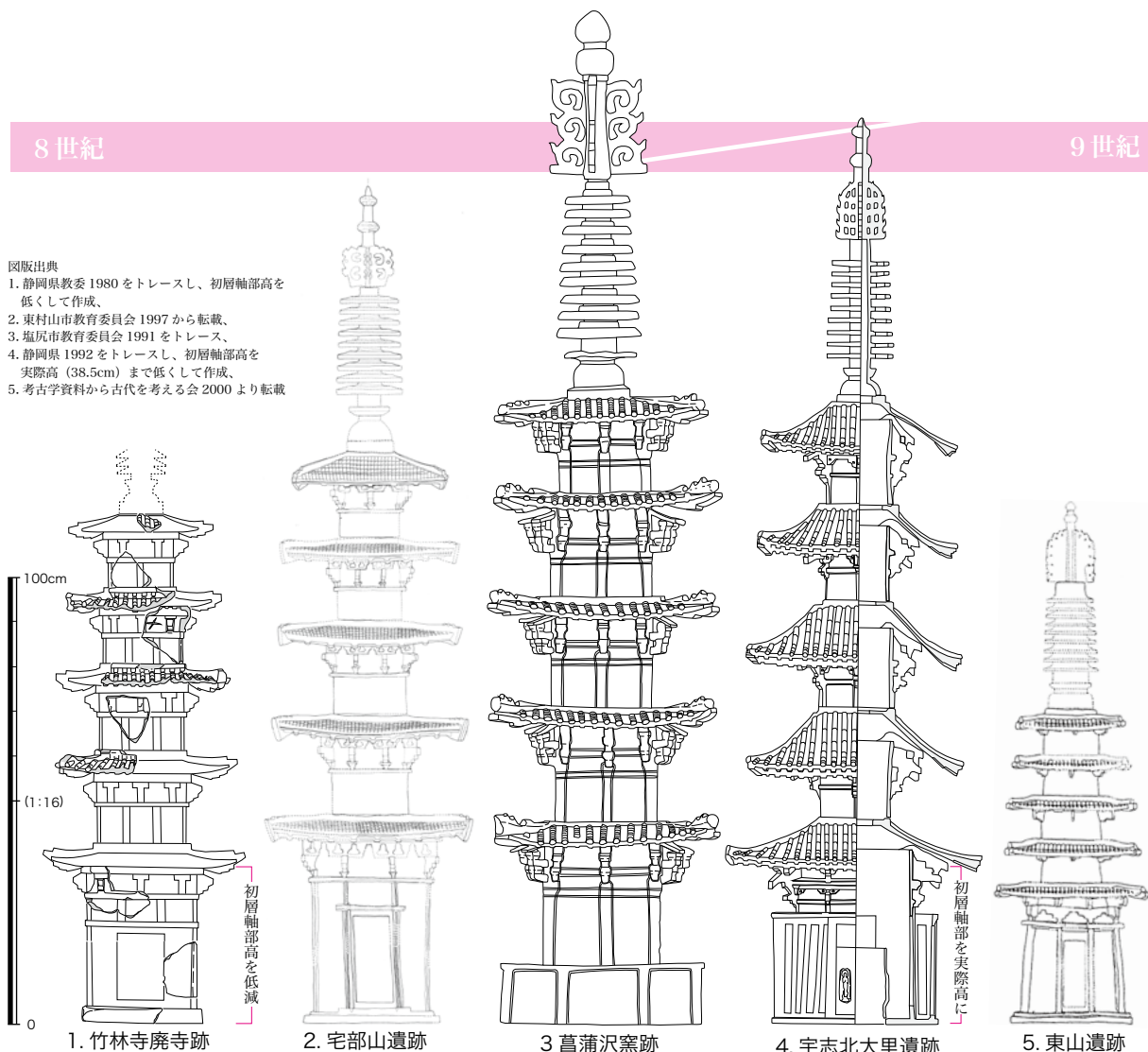


図 8 大型化する瓦塔の大きさ比較 (S=1:16)

り(図9)、古代の瓦塔は実際の塔建築とは異なる指向で進化していたことをあらためて確認するのである。

謝辞

本稿作成にあたり、下記の方々、諸機関の御協力を得ました。記して感謝します。

伊藤明良 岡 千明 瀬川貴文 手島芙美子(敬称略)

北名古屋歴史民俗資料館 名古屋市博物館

名古屋市見晴台考古資料館 鳩山町教育委員会

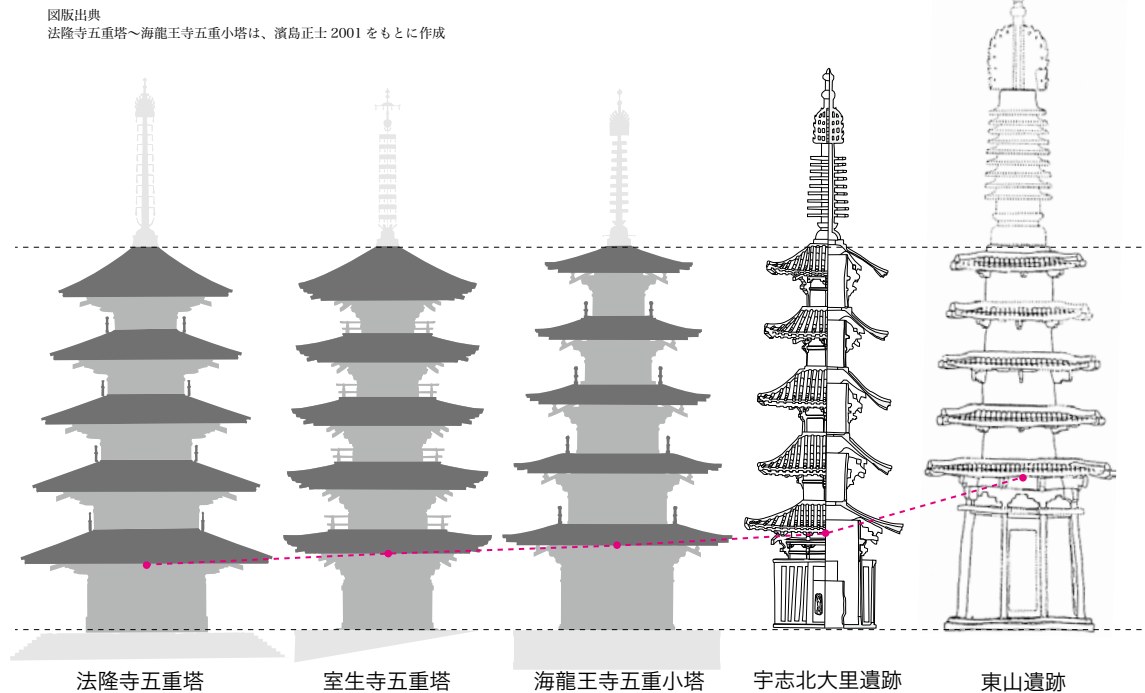


図9 塔建築と瓦塔の比較(縮尺不同)

参考・引用文献

- 愛知県史編さん委員会 2015 『愛知県史 別編 窯業1 古代猿投系』 愛知県
池田敏宏 1998 「瓦塔屋蓋部編年試論Ⅱ-北武蔵1～5 類瓦塔,類似資料を中心として」
『土曜考古』第22号 土曜考古学研究会
石田成年 1997 「摂河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』和泉書院
稲垣晋也 1967 「静岡県引佐郡三ヶ日町志山中発見瓦塔の復元について」『考古学雑誌』第53巻第1号 日本考古学会
大川清 1995 「武蔵国分寺創建時の造瓦組織」『國土館史学』3 國土館大學史學會
考古学資料から古代を考える会事務局 2000 『古代仏教系遺物集成・関東』
塩尻市教育委員会 1991 『菖蒲沢窯跡発掘調査報告』
静岡県 1992 『静岡県史 資料編3 考古3』静岡県
瀬川貴文 2004 「稲沢市『大矢遺跡』にかかわる問題」『名古屋市博物館研究紀要』第27巻
高崎光司 1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第3号 日本考古学会
東京国立博物館 2002 『瓦塔・鷗尾』東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書
永井邦仁 2005 「東海地方の古代瓦塔に関する覚書」『三河考古』第18号
永井邦仁 2006 「東海地方の古代瓦塔研究ノート」『研究紀要』第7号 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2008 「猿投窯型瓦塔の展開(1)」『研究紀要』第9号 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2009 「猿投窯型瓦塔の展開(2)」『研究紀要』第10号 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2013a 「古代東海地域における瓦塔の造立とその背景」『技術と交流の考古学』同成社
永井邦仁 2013b 「第5章第1節 山頂造立瓦塔の系譜-桑下城跡出土瓦塔について-」
『桑下城跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第181集
永井邦仁 2016 「勝川遺跡における古代寺院とその空間」『尾張◎勝川Ⅴ』考古学フォーラム
濱島正士 2001 『日本仏塔集成』中央公論美術出版
東村山市教育委員会 1997 『東京都東村山市多摩湖町出土 瓦塔調査報告書』
三好町教育委員会 2009 『蒔生地区多機能用地(Ⅱ・Ⅲ地区)開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書(K-16・17・34・38)』